



タマネギの病害 ―特にべと病― の見分け方

佐賀県農業試験研究センター ふる古 た田 あき明 こ子

はじめに

農作物には数多くの病害が存在している。それらの病害について、技術者や生産者が診断のポイントを理解し、病害を正しく診断することは、防除を図るうえで最も重要な最初のステップである。

本稿は秋播きタマネギで発生が問題となる病害、特にべと病を中心に、その病徴と見分け方を紹介する。

I 地上部に全身症状が出る病害

1 ベと病（一次感染株）

タマネギべと病の第一次伝染は、土中の卵胞子が播種後または定植後のタマネギへ感染することで起こる。10～12月に苗床または本圃で感染し、翌年2～3月に発病することから、越年罹病株（えつねんりびょうかぶ）とも呼ばれる。植物体が小さい時期に温暖で湿潤な条件により、土中の卵胞子が植物体に感染する。症状は、図-1に示すように全身に現れる。葉は色あせて光沢がなくなり黄色っぽくなり、外側に湾曲する。株全体が開いたような形となり、全身的に萎縮する。このような株は、好適な気象条件（気温が15℃前後で、高湿度）となった明け方、発病株内の連続した複数の上位葉の葉身に、灰色～灰褐色の分生胞子が形成される（WATANABE and SYOBU, 2022）。分生胞子は上位葉を中心に、ブラシ状やピロード状に形成され、肉眼でも観察でき、この点がほかの類似病害と見分けるポイントとなる。発病株は、以降の生長が緩慢で、数回に渡り分生胞子を形成した後は徐々に弱り、最終的には枯死する（図-1）。

2 腐敗病、りん片腐敗病

細菌による腐敗病の場合は、まず葉身の一部が黄化または白化、やや陥没した病斑を形成し、病勢が進展すると、病斑部分が拡大、水浸状に腐敗する。葉の奇形や湾曲が認められる場合もあり、やがて全身が腐敗し消失する（図-1）。

3 萎黄病

萎黄病はファイトプラズマによる病害である。ヒメフタテンヨコバイが媒介し、圃場の中ではまばらに点発することが多い。新葉の黄化、株全体の萎縮、わい化や叢生が見られ、鱗茎は締まりが悪くなる。苗床から収穫時期まで、どの時期においても発生する（図-1）。

4 生理障害等

原因は不明であるが生理的に新葉が黄化し開帳する株が見られる。このような株は、べと病の分生胞子形成に好適な気象条件となっても分生胞子の形成は認められない。また、べと病の一次感染株における新葉の黄化は葉身の一部に限られるが、生理障害の場合は葉身全体が黄化することが多い（図-1）。

II 葉に症状が出る病害

1 ベと病（二次感染した株）

タマネギべと病は、一次感染した株上に分生胞子が形成されて、周囲の株へ飛散することにより二次感染する。そのため、二次感染の症状は、一次感染株の周囲に坪状に多く現れる。二次感染は、気温が15℃程度で、降雨後など高湿度が保たれる日に、飛散した分生胞子がたっぷりの湿度を得ながら発芽することにより感染する（SYOBU and WATANABE, 2022）。二次感染した株は、一次感染株とは全く異なる症状で、全身症状は示さず、葉身に5～10 cm程度の大きさで、